
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 貴方《あなた》

|：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号
(例) 五百八十 | 頁《ページ》

私は貴方《あなた》から送って下さった校正刷五百八十 | 頁《ページ》を今日 | 漸《ようや》く読み了《おわ》りました。漸くというと厭々《いやいや》読んだように聞こえるかも知れませんが、決してそんな訳ではないのです。多大の興味ばかりか、其興味に伴う利益をも受けながら、楽しく読み了ったのです。実をいうと私の都合もあり、又活字組込の関係もありして、長短十八篇の間を休み休み通り抜けたのは、批評を依頼した貴方にも御気の毒ですし、またそれを御約束した私にも多少の不便は出て来たに相違ありませんが、此陥欠を避ける手段は御互になかったのですから、それは双方で我慢する事にして、私の御作に対するざっとした考え丈《だけ》を申し上げます。

まずあなたの特色として第一に私の眼に映ったのは、饒《ゆた》かな情緒を濃《こま》やかにしかも霧《きり》か霞《かすみ》のように、ぼうっと写し出す御手際《おてぎわ》です。何故《なぜ》ぼうっとしているかという、あなたの筆が充分に冴《さ》えているに拘《かか》わらず、あなたの描く景色なり、小道具なりが、朧月《おぼろづき》の暈《かさ》のように何等か詩的な聯想《れんそう》をフリンジに帯びて、其本体と共に、読者の胸に流れ込むからです。私は特に流れ込むという言葉をも此所《ここ》に用いました。もともと淡い影のような像ですから、胸を突つくのでも、鋭く刺すのでもない様です。あなたの書いたもののうちには、人が気狂《きちがい》になる所があります。人が短刀で自殺する所も、短銃《ピストル》で死ぬ所もあります。是等《これら》は大概裏から書くか、又は極《ごく》簡単に叙し去って仕舞《しま》われるので、当り前の場合でも、それ程苦痛に近い強烈な刺戟《しげき》を読者に与えないかも知れませんが、それでも、若《も》し以上に述べたような詩的の雰囲気《ふんいき》の中で事が起らなかったなら、ああした淡い好い感じは与えられますまい。

此ぼうっとした印象が、美的な快感を損《そこな》わない程度の軽い哀愁として、読者の胸にいつの間にか忍び込む理由を、客観的に翻訳すると色々な物象として排列されます。其内で私は歴史的に読者の過去を蕩揺《とうよう》する、草双紙とか、薄暗い倉とか、古臭《ふるくさ》い行灯《あんどん》とか、または旧幕時代から連綿とつづいている旧家とか、温泉場とかを第一に挙《あ》げたいと思います。過去はぼんやりしたものです。そうして何処《どこ》かに懐《なつ》かしい匂いを持っています。あなたはそれを巧《たくみ》に使いこなして居るのでしょう。

単に歴史上の過去ばかりではありません、あなたは自分の幼時の追憶を、今から回顧して忘れられない美しい夢のように叙述しています。私は一、二、三、四、と段々読んで行くうちに此種の情調が、私の周囲を蜘蛛《くも》の糸の如く取り巻いて、散文的な私を、何時《いつ》の間にか夢幻の世界に連れ込んで行ったのをよく記憶しています。私の心は次第々々に其中に引き込まれて、遂に「珊瑚樹《さんごじゅ》の根付《ねつけ》」迄行って全くあなたの為に擒《とりこ》にされて仕舞ったのです。だから幼時の記憶として其儘《そのまま》を叙述していない「夷講《えびすこう》の夜の事であった」に至って却《かえ》って失望しようとしたのです。

私は此種の筆致《ひっち》を解剖して第二番目に遠くに聞こえる物売の声だの、ハーモニカの節だの、按摩《あんま》の笛《ふえ》の音だのを挙げたいと思います。凡《すべ》て声は聴いているうちにすぐ消えるのが常です。だから其所《そこ》には現在がすぐ過去に変化する無常の觀念が潜《ひそ》んでいます。そうして其過去が過去となりつつも、猶《なお》意識の端に幽霊のような朧氣《おぼろげ》な姿となって佇立《たたず》んでいて、現在と結び付いているのです。声が一種切り捨てられない夢幻的な情調を構成するのは是が為ではないでしょうか。新内《しんない》とか端唄《はうた》とか歌沢《うたざわ》とか浄瑠璃《じょうるり》とか、凡《すべ》てあなたのよく道具に使われる音楽が、其上に専門的な趣をもって、読者の心を軽く且《か》つ哀れに動かすのは勿論《もちろん》の事ですから申し上げる必要もないでしょう。然《しか》しあまり自分の好尚に溺《おぼ》れて遣《や》り過ぎた痕迹《こんせき》を残したのもないとは云われません。第一編の「硝子《ガラス》問屋」の中にはその筆があまり濃く出過ぎてはいますまいか。

叙景に於てもあなたは矢張り同じ筆法で読者の眼を朦朧《もうろう》と惹《ひ》き付《つ》ける事が好《すき》であるように見受けました。要するに水でも樹《き》でも、人の顔でも凡《すべ》てあなたの眼にうつるものは、決して彫刻的にあなたを刺戟《しげき》していないように見えます。全く絵画的にあなたの眸《ひとみ》を

彩《いろ》どるのだらうと思います。しかもアンブレショニストのその如く極めて柔かです。そうして何処《どこ》かに判然しないチャームを持っています。だから私は「荒布橋《あらめばし》」の冒頭に出てくる燕《つばめ》の飛ぶ様子や、「夷講《えびすこう》」の酒宴の有様を叙するくだりに出会った時、大変驚ろいたのです。二つのものは平生のあなたの筆で書きこなされたものとは思えない位硬いのです。

要するに貴方の小説に有り余る程出てくるのは一種独特のムードでしょう。だから夫《それ》がまとまらない上に、筋が通らないとか、又は主人公の哲学観などが露骨に出てくると、一方が一方を殺して、少し平生の御手際《おてぎわ》に似合わない段違いのものが出来はしまいかと疑われます。「荒布橋」とか、「岡田君の日記」とか、「六月の夜」の一部分とかになると、其所《そこ》に手荒で変に不調和なものが露《あら》われているようです。其代りよし気分 | 丈《だけ》のものでも筋のまとまらない「河岸《かし》の夜」といったような、（其中には六《む》ずかしい議論も織り込まれてはいるが）ただ装飾的で左程《さほど》他《ひと》の情緒をそそる事の出来ないものもあると申し添えなければなりません。悪口の序《ついで》だから、「北より南へ」という短篇の評も此処《ここ》に付け加えて置きたいと思います。ああ云った調子のは、アナトール・フランスの短篇に沢山《たくさん》あります。そうして遺憾《いかに》ながら彼の方が貴方よりずっと旨《うま》いと思います。

あなたの作に就いて情調とか、ムードとか云うものを挙《あ》げて、それを具合好く説明すれば、既に大半の批評は出来上ったように考えられるのですが、其ムードを作り上げるために、河岸《かし》の寿司屋《すしや》とか、通りの丸花とか、乃至《ないし》は坊間の音曲など丈《だけ》が道具になっているという意味では決してないのです。あなたの書き下す人間が、人間として一人前に活動しつつ、同時に其一篇のムードを構成している事は疑もない事実です。亮さんでも、京さんでも、彼等のする事は皆此両様の主意を同時に満足させてるではありませんか。「三人の従兄弟《いとこ》」などになると、其上に又親父さんの青年に対する反抗的な感情が一篇の主意もしくは哲理として後の方に出ています。

次にあなたの理解力に就いて一言其特色を述べたいと思います。あなたの頭の働らきは全く科学的でありながら、其 | 濃《こま》やかな点が、あなたの情緒の描写によく調和して、綿密によく行き渡っています。そうして不思議にもそれが普通のありふれた作物のように、くたくだしくならないのです。いくら微細な心的現象の解剖でも、又は外観からくる人間の精密な描写でも、決して干乾《ひから》びていません。必ず委曲要領をつくすのみならず、其所《そこ》にあなたの独得の一種の趣《おもむき》が漂《ただよ》っているのです。私の見る所によると其趣はあなたの観察が突飛に走らない程度で、場合々に適当な新らしい刺戟《しげき》を読者に与え得るからだらうと思います。「霊岸島の自殺」や「船室」の前半の如きは、その方面のいい作例と見て差支《さしつかえ》ないでしょう。ことに前者に於て、ある男とある女の性的関係の階級等差が、あれ程細かく書いてありながら、些《ちっ》とも卑猥《ひわい》な心持を起させずに、ただ精緻《せいち》な観察其物として、他をぐいぐい引き付けて行く処などは、何《ど》うしても旨《うま》いと云わなければなりません。此小説は主人公が東京へ出てからの心の変化に、前半程 | 緻密《ちみつ》な且《か》つ穏当な、芸術的描写が欠けているため、多少のむらがあると思いますが、世間でいう小説の意味から批判すると、或は圧巻の作かも知れません。

要するに貴方の書き方は絹漉《きぬご》し豆腐のように、又婦人の餅肌《もちはだ》のように柔らかなのです。上部ばかり手触りが好いのかと思うと、中味迄ふくふくしているのです。線でいうと、外《ほか》の人の文章が直線で出来ているのに反して、あなたのは何処《どこ》も婉曲《えんきょく》な曲線の配合で成り立っているような気がします。しかも其曲線のカーヴが非常に細かいのです。外の人が一尺で継《つ》ぎ易《か》える所を、あなたは僅《わず》か一寸か二寸の長さで細かに調子よく継ぎ足しては前へ進んで行くとしか形容出来ません。其所《そこ》にあなたの作物には、他に発見する事の出来ないデリケートな美くしさが伏在しているのでしょう。もう一つ比喻を改めて云えば、あなたの文章は楷書《かいしよ》でなくって悉《ことごと》く草書です。それも懷素のような奇怪な又 | 飄逸《ひょういつ》なものではありません、もっと柔らかに、もっと穏やかに、そうして時々粹な所を仄《ほのめ》かすといったような草書です。

此冗長な手紙が、もし貴方の小説集の序文として御役に立つならば何《ど》うぞ御使い下さい。私は貴方に対する愉快的義務として、それを認めたのですから。

一月十八日夜

[# 地付き] 夏目金之助

木下杢太郎様

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、1915（大正4）年2月。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル： 底本では、促音、拗音のふりがなは普通の大きさの仮名になっている。（校正者記す）

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。